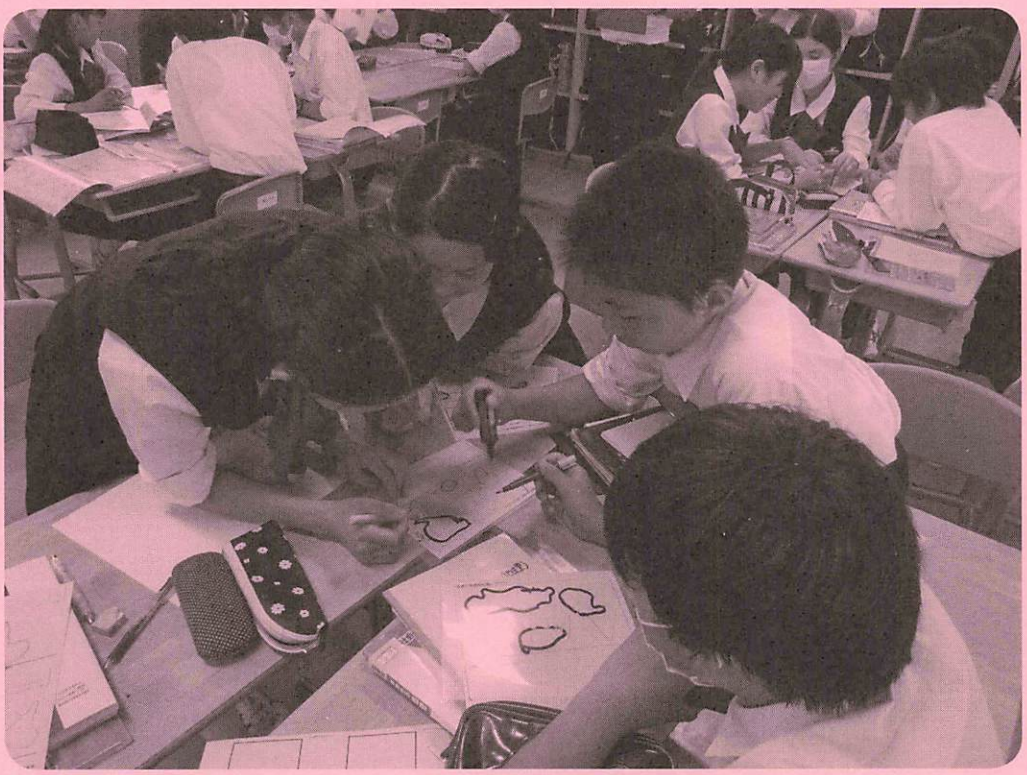
社会科

教科領域研究テーマ
【よりよい自分や社会の姿を思い描く力の育成】



社会科

よりよい自分や社会の姿を思い描く力の育成

実　践　者　西田　剛志，田中　寿佳，宮本　真人
愛媛大学研究パートナー　川岡　　勉，張　　貴民，川瀬久美子，鴛原　　進

第１章　はじめに

私たち社会科では，「持続可能な社会を支える資質・能力」として，よりよい自分や社会を思い描く力を育成したいと考え研究を行った。なぜなら，持続可能な社会が求める現在かつ未来のニーズは多様であり，変化の激しい現代においては次々と新たなニーズも生み出されてくる。そのニーズを見極め，それを満たしていくためには，未来社会をイメージし，その形成に向けて自分がどのように行動すべきかを構想できることが必要であると考えたからである。しかし，未来社会のイメージも自分の行動も独りよがりのものであってはならない。仲間と思いや考えを伝え合い，互いの思考を広げ深め合う対話的な学びにより「よりよさ」を構築していく必要がある。そのために，次の三つの点を中心に研究・実践を進めることとした。

(Ⅰ)　問題解決的な学習の充実
(Ⅱ)　「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実
(Ⅲ)　資質・能力が育つ評価の工夫

⇔

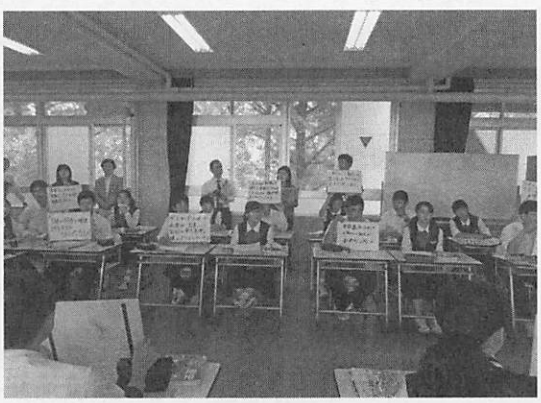
論理的な思考力・表現力

その際，言語技術教育のメソッドを活かしながら，様々な場面で論理的な思考力・表現力を発揮させることを特に留意し，よりよい自分や社会を思い描く力の育成を図っていく。なお，社会科では「論理的に思考し表現する力」を，「事象や問題の背景を熟考（時間的・空間的な視野をもって，多面的・多角的に考察すること）して自分の意見や考えをもち，その根拠を明確にして表現する力」と捉えた。

本年度は，各分野で次のようにテーマを設定し，学習活動を工夫した。

地理的分野……社会の形成者の一員として未来を構想する社会科学習の展開
歴史的分野……つながりを捉える社会科学習の展開
　　あるべき姿を求める歴史学習の創造





第２章　研究の実際

研究（その１）

社会の形成者の一人として未来を構想する社会科学習の展開
― 地理的分野　世界の諸地域「アジア州」の実践より ―

（実践者）西田　剛志

１　研究テーマ設定の理由

将来の予測が困難な，複雑で変化が激しい今の時代に生きる生徒たちには，これとどのように向き合い関わっていくのかが問われている。そこを避けて通ることができないからこそ，生徒たちにはしっかりと社会や世界に向き合い，関わり合い，現在と未来に向けて，自らの人生を切り拓いていくことが求められている。具体的には，社会の変化に受け身ではなく主体的に向き合って関わり，様々な問題を見いだし解決に努めることが求められよう。また，自分を取り巻く様々な人々と関わり合いながら，対話を通して他者のもつ考えや情報を取り込んだり，逆に発信したりし合いながら，よりよい解決策を探ることも求められよう。

そこで生徒たちには，広い視野から社会的事象を捉えさせ，社会や世界の中での立ち位置を自覚させたい。また，自ら問いを立て，級友と「きょうどう」の精神を発揮し合わせながら主体的に問題解決を目指させたい。また，持続可能な社会づくりの観点からの考察を通して，思考したことを行動化に結びつけさせたい。これらの活動を通して，社会の形成者の一員として社会に参画し「よりよい社会をつくる」「よりよい社会に生きる」に向けて歩み続けるために必要な資質・能力を育成したいと考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

本年次は，次の三つの「研究の内容及び方法」により，研究を推進することとした。

(Ⅰ)　問題解決的な学習の充実
　生徒に社会や世界の中での立ち位置を自覚させ，社会的事象に主体的に向き合わせるために，資料の提示や問い，学習展開の工夫をする。

(Ⅱ)　「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実
　広い視野から社会的事象を捉え，互いの社会的な見方や考え方を広げ深めさせるために，また，生徒の自尊感情を醸成させるために，生徒同士の学びが生かされ合う学び合いの場を設ける。

(Ⅲ)　資質・能力が育つ評価の工夫
　生徒の学びを「よりよい社会をつくる」「よりよい社会に生きる」よう構想し続ける「実践力」につなげるために，パフォーマンス課題を適切に設け，生徒自身に思考力，判断力，表現力等の成長や変容を実感させる。

３　研究の実際

(1)　生徒の実態

本学級の生徒は４月以来，地理的分野の学習を通して，私たちの住む日本の，世界における「位置」を確認しながら学習を進めてきた。「世界の姿」の単元では，各自に単元の初めと終末で世界の略地図を描かせ，これを比較させた。約半数の生徒が日本とその周辺部，ユーラシア大陸の東側とオーストラリア大陸程度を，○で描くことができる程度だったが，単元の終末の世界の略

地図への表現から，９割の生徒は形や位置に注意しながら描くことができており，生徒の世界の広がりを見取ることができた。広範な世界の中に位置する日本という意識は，略地図への表現から見取ることができた。しかし，描いた内容を根拠を示しながら文章で表現できない生徒は約５割いることから，根拠となる知識や技能の習得が不十分であったと考えられる。

続く「世界各地の人々の生活と環境」では，直接体験することができない世界各地の人々の生活を，直接体験することができる日本での衣・食・住などを基準に比較させながら，その特徴を大まかに捉えさせることで，単なる空間的な「位置」ではなく，生活の様子を加味した世界の中の日本やそこに住む私たちの「位置」を知ることができた。一方，家屋の形状の特徴がみられる理由を，具体的な資料を用いたり，他の資料と関連付けたりと根拠を明確にして説明できるものは約１割程度に過ぎなかった。

(2) 論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

社会科では「事象や問題の背景を熟考し，自分の意見や考えをもち，その根拠を明確にして表現する力」と捉えている。上記「２　研究の内容及び方法」を工夫することにより実践する。

具体的には，上記の力を「きょうどう」の精神を発揮しながら学び合う問題解決的な学習の過程で育成する。その際，「熟考」させるために，問題解決的な学習の過程で小集団で役割分担して社会的事象や問題の背景を多面的・多角的に捉えさせるよう学習の展開を工夫する。また，学習を通して見えてきた新たな学習問題に対して，現在の社会や世界の「持続可能性」や生徒の将来への提案の「実現可能性」などから考察させることにより空間的・時間的な視野をもって考察するよう問いやパフォーマンス課題を工夫する。

また，「自分の意見や考え」をもたせるために「きょうどう」する学習者であること意識させて自尊感情の醸成につながるよう小集団内で役割分担を明確にする。「根拠を明確にして表現」させるために，論点を整理して表現させる。そしてこれらの成果を表現させる際，主体的な私の「立ち位置」の自覚のもと，「よりよい社会」づくりを志向して考えさせることにも留意する。

(3) 授業の実際

ア　指導の実際

(ア) 概　要

単　元　　世界の諸地域「アジア州」（全７時間）

単元目標

広範囲に広がり，巨大な人口を抱えるアジア州が近年，急速に経済成長を遂げてきた背景を理解し，今後も成長を続けていくためには，アジア州をはじめ，世界の国々が様々な問題の解決に向けて協力し合うことや将来のことも考えて行動することが必要であることに気付く。

本質的な問い

アジア州はなぜ急速に経済成長することができたのだろうか。また，アジア州がこれからも持続的に成長していくためには，アジア州の国々やそこに住む私たちは，様々な問題の解決に向けて，どうすればよいのだろうか。

永続的な理解

アジア州は，古代文明や様々な宗教の発祥の地であるように，長い歴史の中で生活や文化，産業がはぐくまれ，そこには共通性があるとともに地域ごとの多様性もある。近年は，欧米諸国による植民地支配や地域紛争，政情の不安などを乗り越え，日本や諸外国と関わったり地域の特色を生かしたりしながら急速に経済成長を遂げてきた。しかしこの変化が資源や環境，社会のひずみ，国際関係の緊張など，様々な問題を引き起こしている。よりよい社会や世界を築くことを目指し，持続可能な社会や世界の成長のためには，各国が様々な問題の解決に向けて協力し合うことが必要であるとともに，世界の中の日本に住む私たちも，どのように行動すればよいのかよいのかを考える必要がある。

評価目標と評価方法

評価目標	評価方法
① 身近なアジア州の地域的な特色について，興味・関心をもって意欲的に追究しようとする。（関心・意欲・態度）	◎パフォーマンス課題 ・あなたはアジア州の経済成長の様子を調査してきました。経済成長とともに発生した問題を解決しながら，これからもアジア州が成長していくためにはどうすればよいか，B５判１枚のレポートにまとめなさい。(①②③) ○ワークシート (①②③) ○ペーパーテスト (③④)
② アジア州の急速な成長と，それとともに見られるようになった問題に対して，どのように対応していけばよいのかを，その持続可能性を踏まえながら多面的・多角的に考察し，その結果を適切に表現している。（思考・判断・表現）	
③ 学習問題やパフォーマンス課題の解決に向けて，収集した資料や協働学習者の学習成果，意見を適切に選択して，読み取ったり図表に整理したりしている。（資料活用）	
④ アジア州をいくつかの地域に分けて人口や産業の特色を整理し，地域ごとの違いを踏まえてアジア州の地域的特色について理解し，その知識を身に付けている。（知識・理解）	

指導計画（全７時間）

次	学習内容	◇評価規準	時間
1	アジア州を大まかに捉える ○アジア州の自然環境と人口 ○地域によって異なるアジア州の生活や文化	◇既習事項や身近な事例を通して，アジア州の地域的特色について追究しようと意欲が高まっている。（関心・意欲） ◇ユーラシア大陸の広範囲に広がり，巨大な人口を抱えるアジア州の多様性を，主題図や資料を用いて調べ，まとめている。（資料活用）	2
2	アジア州の地域的特色を，経済成長の視点から捉えよう ○アジア州の経済成長の背景 ○持続可能性から見たアジア州の経済	◇アジア州の各地域の急速な経済成長の背景について理解している。（知識・理解） ◇アジア州の経済成長の背景やそれとともに見られるようになった問題の解決策を自分なりに判断して考察し，表現している。（思考・判断・表現） ◇問題解決に必要な情報を収集し，ワークシートに整理している。（資料活用）	3
3	パフォーマンス課題 ○持続可能なアジア州の成長を考える ○自分の成長を振り返る	◇パフォーマンス課題に意欲的に取り組み，収集した資料や情報を根拠に，多面的・多角的に考察している。（関心・意欲）（思考・判断・表現）（資料活用）	2

(イ) 本単元における指導と評価の工夫

先ず本単元と生徒の実態について述べる。本生徒にアジア州に関する事前の調査で，「アジア州と日本との関わり」について質問したところ，身近な生活を支える多くの中国製品を挙げる生徒が約４割，その他，工業化に伴う環境汚染の問題，領土問題を挙げるなど関心が高い。よって生徒は，主体的に問題を見いだし，解決に向けて学習に取り組めると考えた。また生徒にとって最も身近な州であることから，主体的な私の「立ち位置」の自覚のもと，アジア州の中の日本に住む私，アジア州で見られる身近な社会的事象と関わっている私，その私はどう向き合っていけばよいのか，何ができるのかといった実践力につなげることができると考えた。また，アジア州が長い歴史をもつとともに広範囲に及び多面性があることから，多面的・多角的な視点から捉えさせることに適していると考えた。

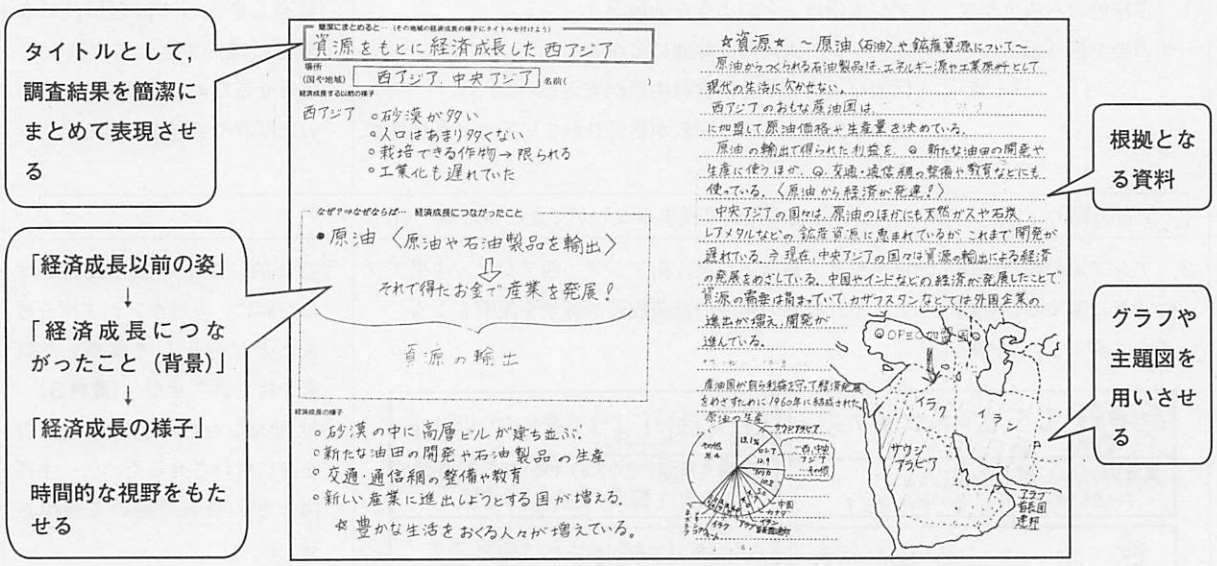
これに対して実践した指導の工夫と実際を，前述「２　研究の内容及び方法」に即して述べる。

(I) 問題解決的な学習の充実

アジア州の地域的特色を大観させた後に設ける主題を，「アジア州は，なぜ急速に経済成長することができたのだろうか」としてその背景を問題解決的な学習により追究させ，アジア州の姿

を的確に把握して地域的特色を理解させた。この問いに対して主体的に学習させるために，導入ではアジア州の都市の景観写真や，工業製品出荷額の変化を示す統計資料，身の回りのアジア州の工業製品などの実物資料を提示し，アジア州の経済成長を強く印象づけられるよう工夫した。

また，問いを立てたり，追究成果をまとめさせるワークシートを作成したりする際に，論理的に思考し表現させることをねらい，次の三つに留意した。一つ目は，ワークシートを「経済成長以前の姿」「経済成長につながったこと（背景）」「経済成長の様子」を順に並べ，思考を整理させたことである。二つ目は，調査結果を簡潔にまとめさせたタイトルを付けさせたことである**（資料１）**。三つ目は，新たな学習問題として「アジア州を，将来にわたって持続的に経済成長させる」という視点から，今，あるいは今後取り組まなければならない課題について考えさせ，更に将来にわたる時間的な視点を，またその課題解決策を考えさせたことである。因果関係を明確にして整理させたり，重要な事象を見いださせたりしてそれを表現させ，論理的な思考を促した。また，アジア州の経済成長を負の視点から見させたり，将来像を思い描かせたりすることで，多面的・多角的に，また時間的な視野をもって社会的事象を捉えさせるよう促した。



資料１　生徒の思考を整理して表現させるワークシート

(Ⅱ)「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

アジア州の地域的特色を大観させたことを踏まえ，「多様性のあるアジア州の経済成長の様子にも多様性がある」との仮定から，問題解決的な学習の過程で，小集団内でアジア州の各地域を分担して調査させた。ここでは協働学習者であることを前提にして，その調査結果を持ち寄らせることでアジア州全域の経済成長の姿が捉えられるものとした。即ち，自分の追究成果は自分のみならず他者の追究には不可欠であること，また，必ず生かされるものであることを前提にしている。その追究成果を情報共有の場で説明させたり，生徒同士で意見を交換させたり，それを根拠に自分の考えを表現させたりした。これらの追究過程や対話や議論を通じて多面的・多角的に，また空間的な視野をもって社会的事象を捉えさせるよう促し，多様な考えを理解したり自分の考えを広げたりできるような場とした。



資料２　各地域の専門家になって，「きょうどう」の精神を発揮しあう姿

(Ⅲ) 資質・能力が育つ評価の工夫

評価に際しては，永続的な理解にたどりつかせ，「よりよい社会をつくる」ことを志向した「実践力」につなげるパフォーマンス課題に取り組ませた。そしてこれを評価するものとした。また，この課題に対する表記を見直しさせることで表現の力等の成長や変容を実感させた。なお詳細は，次章イ④で述べるものとする。

イ　生徒の学びの実際

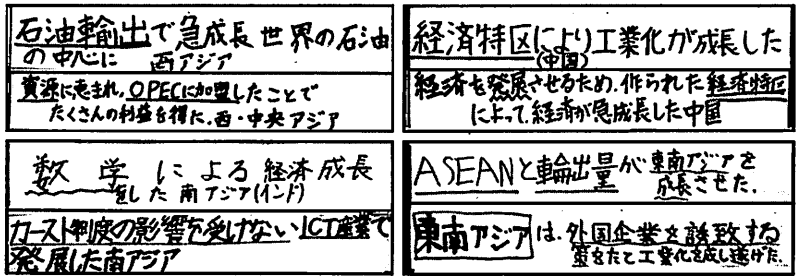
① 主　題　　アジア州の地域的な特色を，経済成長の視点から捉えよう
（5／7時間，指導計画2次のうちの本時その3）

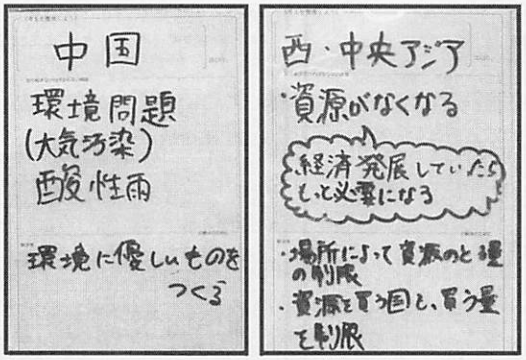
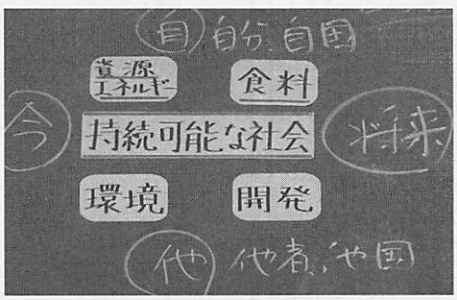
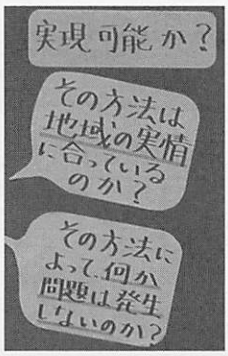
② ねらい

○経済成長から見たアジア州を，地域の特色や抱える問題を踏まえて理解する。

○世界で起きている社会的事象を自分との関連から考察する。

③ 展　開

学習活動（形態）	○教師の働きかけ　・予想される生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　多様性のあるアジア州の姿を振り返る。（一斉）	○アジア州は，どのような地域か。 ・ユーラシア大陸の広範囲に広がる。 ・巨大な人口を多くの食料生産が支える。 ・様々な生活や文化，宗教が信仰されているなど多様性がある。	○見通しをもって問題解決的な学習に臨んできたことを振り返らせるために，導入の際に用いた写真や資料を提示した。
学習問題①　アジア州は，なぜ急速に経済成長することができたのだろうか。		
2　アジア州の経済成長の背景に関する調査結果を共有する。（一斉）  資料3　調査結果を簡潔にまとめ，情報を共有する（一部）	○東アジア，東南アジア，南アジア，西アジア・中央アジア，それぞれの地域の経済成長の背景を説明しよう。	○空間的にアジア州を捉えさせるために，多様なアジア州を地域ごとに分担して調査した結果を持ち寄らせた。（資料3） ○地理的なものの見方や考え方を身に付けさせるために，主題図などの資料を用いて表現させた。 ◇経済成長から見たアジア州の特色を調査結果を基に根拠を明確にして説明している。（ワークシート）
学習問題②　「アジア州を，将来にわたって持続的に経済成長させる」という視点から，今，あるいは今後取り組まなければならない課題は何だろう。		
3　アジア州の将来について，経済成長の持続可能性の視点から話し合う。（小集団） ↓ （全体）	○見いだした課題は，どのようにすれば解決できるのだろう。 ・中国は，環境問題に対して周辺国にも影響が出ないように規制する。 ・石油輸出国は，今使ってしまわないで，将来も輸出できるように量を調整する。鉱産資源には限りがあるから。	**○対話や議論を通じて多様な考えを理解したり自分の考えを広げたりできるようにするために小集団内で分担して調査した結果を持ち寄らせ，自分の考えを根拠を明確にして説明させた。【協同】**
4　持続可能な社会や世界を築くために，あるべき姿を構想する。（小集団）	○持続可能な社会や世界を築くために，世界の国々や私たちは，どのようすればよいのだろう。	**○主体的な私の「立ち位置」の自覚のもと志向させるために，持続可能性の視点から自分や級友の意見を検証させた。【協働】**

課題を抱える国や地域 → 課題 → 解決策 → ↓ （全体） 5　持続可能な社会や世界を形成するための考え方をまとめる。 （一斉）	 資料４　追究の過程で見いだした課題と，その解決策 ○みんなの意見を整理して持続可能な社会や世界をつくっていくための考え方をまとめよう。  資料６　持続可能な社会を形成するための考え方	 資料５　持続可能性の検証のポイント ○「よりよい社会をつくる」ことを目指し，主体的に実践する社会の形成の一員となる事を促すために，生徒の発言の中から持続可能な社会の考え方を導き出す。（資料６） 【協働】

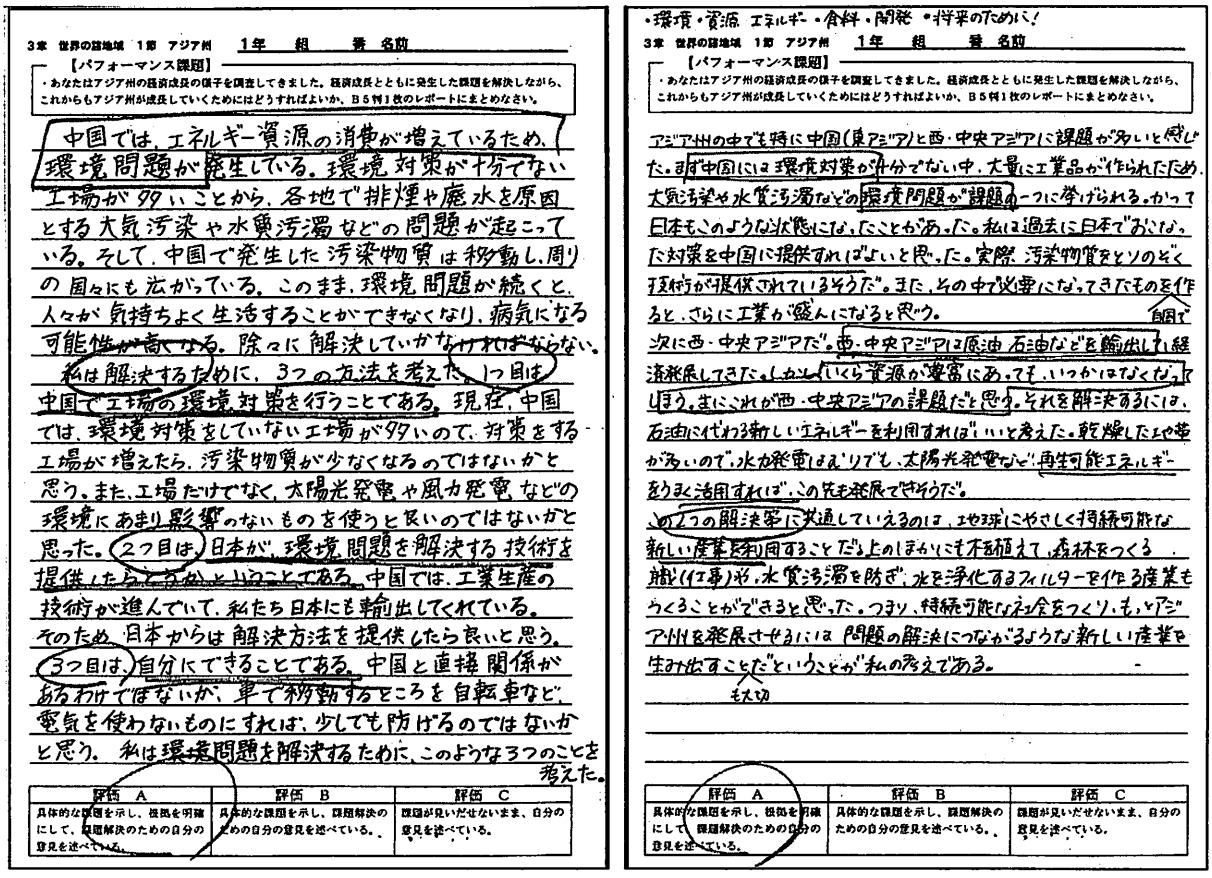
④　思考や表現の実際

ここでは，本単元の終末（６／７時間，指導計画３次のうちのその１）で取り組ませた，パフォーマンス課題への生徒の思考や表現の実際を述べる。本単元ではその課題を，「あなたはアジア州の経済成長の様子を調査してきました。経済成長とともに発生した問題を解決しながら，これからもアジア州が成長していくためにはどうすればよいか，Ｂ５判１枚のレポートにまとめなさい。」とした。この問いはアジア州の抱える環境や資源など，生徒に身近で興味深い内容も多く，実感をもって追究することができる上，これらに着目させることで世界で起こっている問題に向き合う必要性を強く感じることができると考えた。よってこれは生徒に，社会の形成者の一員として主体的な私の「立ち位置」の自覚のもと，解決に向けて取り組ませ「よりよい社会」づくりを志向させる課題であると考える。とりわけ「実践力」ということについては，生徒に根拠を明確にして表現させることが，社会の形成者の一員として主体的な私の「立ち位置」をしっかりと自覚させた上で育成されるものと考えている。よって評価基準も以下のものとし（**資料７**），生徒には「自分の意見」に「根拠を明確に」させることを求めた。

評価する観点
①関心・意欲・態度
②思考・判断・表現
③資料活用

	評価　A	評価　B	評価　C
①	②具体的な課題を示し， ③根拠を明確にして， ②課題解決のための 自分の意見を述べている。	具体的な課題を示し，課題解決のための自分の意見を述べている。	具体的な課題が見いだせないまま，自分の意見を述べている。

資料７　パフォーマンス課題に対する評価基準と観点



3章 世界の諸地域 1節 アジア州 1年 組 番 名前

【パフォーマンス課題】

・あなたはアジア州の経済成長の様子を調査してきました。経済成長とともに発生した課題を解決しながら、これからもアジア州が成長していくためにはどうすればよいか、B5判1枚のレポートにまとめなさい。

中国では、エネルギー資源の消費が増えているため、環境問題が発生している。環境対策が十分でない工場が多いことから、各地で排煙や廃水を原因とする大気汚染や水質汚濁などの問題が起こっている。そして、中国で発生した汚染物質は移動し、周りの国々にも広がっている。このまま、環境問題が続くと、人々が気持ちよく生活することができなくなり、病気になる可能性が高くなる。除々に解決していかなければならない。

私は解決するために、3つの方法を考えた。1つ目は中国で工場の環境対策を行うことである。現在、中国では、環境対策をしていない工場が多いので、対策をする工場が増えたら、汚染物質が少なくなるのではないかと思う。また、工場だけでなく、太陽光発電や風力発電などの環境にあまり影響のないものを使うと良いのではないかと思った。2つ目は、日本が、環境問題を解決する技術を提供したらどうかということである。中国では、工業生産の技術が進んでいて、私たち日本にも輸出してくれている。そのため、日本からは解決方法を提供したら良いと思う。3つ目は、自分にできることである。中国と直接関係があるわけではないが、車で移動するところを自転車など、電気を使わないものにすれば、少しでも防げるのではないかと思う。私は環境問題を解決するために、このような3つのことを考えた。

評価 A	評価 B	評価 C
具体的な課題を示し、根拠を明確にして、課題解決のための自分の意見を述べている。	具体的な課題を示し、課題解決のための自分の意見を述べている。	課題が見いだせないまま、自分の意見を述べている。

・環境・資源 エネルギー・食料・開発 ・将来のために!

3章 世界の諸地域 1節 アジア州 1年 組 番 名前

【パフォーマンス課題】

・あなたはアジア州の経済成長の様子を調査してきました。経済成長とともに発生した課題を解決しながら、これからもアジア州が成長していくためにはどうすればよいか、B5判1枚のレポートにまとめなさい。

アジア州の中でも特に中国(東アジア)と西・中央アジアに課題が多いと感じた。まず中国には環境対策が十分でない中、大量に工業品が作られたため、大気汚染や水質汚濁などの環境問題が課題の一つに挙げられる。かつて日本もこのような状態になったことがあった。私は過去に日本でおこなった対策を中国に提供すればよいと思った。実際、汚染物質をとりのぞく技術が提供されているそうだ。また、その中で必要になってきたものを作ると、さらに工業が盛んになると思う。

自国で次に西・中央アジアだ。西・中央アジアは原油、石油などを輸出し経済発展してきた。しかしいくら資源が豊富にあっても、いつかはなくなってしまう。まさにこれが西・中央アジアの課題だと思う。それを解決するには、石油にかわる新しいエネルギーを利用すれば"いい"と考えた。乾燥した土や草が多いので、水力発電はもちろんでも、太陽光発電など再生可能エネルギーをうまく活用すれば、この先も発展できそうだ。

この2つの解決策に共通しているのは、土や環境にやさしく持続可能な新しい産業を利用することだ。上のほかにも木を植えて森林をつくる職(仕事)や、水質汚濁を防ぎ、水を浄化するフィルターを作る産業もうくることができると思った。つまり、持続可能な社会をつくり、もっとアジア州を発展させるには問題の解決につながるような新しい産業を生み出すことだ"という"ことが私の考えである。

もちろん

評価 A	評価 B	評価 C
具体的な課題を示し、根拠を明確にして、課題解決のための自分の意見を述べている。	具体的な課題を示し、課題解決のための自分の意見を述べている。	課題が見いだせないまま、自分の意見を述べている。

資料８　実際の生徒のパフォーマンス課題に対する思考と表現

資料８の生徒は，二人とも評価Ａである。それぞれ先ず各地域の課題を端的に述べ，問題の原因あるいは解決策の根拠を具体的な事象を用いて説明している。特に左の生徒は，ナンバリングすることで，論点を整理して表現している。右の生徒は授業で獲得した「持続可能な社会を形成するための考え方」生かして表現している。なお，このパフォーマンス課題における評価結果は，評価Ａが59．7%，評価Ｂが40．3%，評価Ｃが０%であった。この評価の後，不十分であった生徒には朱書して論理的な思考を促した。

ウ　考　察

(I)　問題解決的な学習の充実

○アジア州各地域の調査結果を整理した資料や調査結果を簡潔にまとめさせたタイトルから，約７割の生徒は経済成長につながった背景を主題図やグラフを用いて地理的事象を整理したり，最も重要な事象を選択したりして適切に表現することができていた。これは，前述のワークシート作成の工夫が，生徒に調査すべき内容を理解させ，見通しをもって追究させることに効果的であったと考える。

○学習問題①に対して経済成長につながった背景を多面的・多角的に捉えていた。また，パフォーマンス課題に対してアジア州の現状を踏まえ，将来の持続可能な成長への課題解決のための意見を約６割の生徒が時間的な視点をもって記述できていた。これは，学習の形態やパフォーマンス課題の設定が効果的であったと考える。

○事後のアンケートで生徒が一番印象に残っている活動として，「パフォーマンス課題に対して，自分が調べたものなどを使い，アジア州を持続可能な社会にするために自分で考えたこと」「アジア州の経済成長について，自分で調べたこと」などを上げる生徒が多かった。これは，自ら学ぶ学習展開が，主体的な学びにつながっているものと考える。

(Ⅱ) 「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

○明確な役割分担のもと追究し，自分の追究成果やそこから得られた考えを積極的に級友に伝えようとする姿が随所に見られたことから，自分のみならず他者の学びのために意欲的に追究し，自ら学び合おうとする姿勢が芽生えたと考えられる。

○事後のアンケートで生徒が一番印象に残っている活動を上げる理由として，「同じ地域でも，人によって見え方が違うことが分かったから」「自分が気付けなかったことを，他の人が資料を見付けて教えてくれた」「情報を共有する場面で，みんなで調べたことを基に話し合えたから」などを上げていた。このことから，生徒の見方や考え方を広げるのに効果があるとともに，お互いの学びが生かされることにやりがいを感じられる活動になっていることが分かる。

○事後のアンケートで「小集団学習で友達の意見や考えは，自分の役に立っている」と答えた生徒は69％いるのに対し，「自分の意見や考えは，友達の役に立っている」と答えた生徒は36％にとどまっていた。また，発表の声が小さかったり，級友の調査結果を生かしきるまでにはなっていなかったりしたことから，お互いの学びが生かされ合う姿の「可視化」や課題設定が不適切であり，自尊感情の醸成には不十分であったと考えられる。

(Ⅲ) 資質・能力が育つ評価の工夫

○パフォーマンス課題に対する記述に，約６割の生徒が課題に対する解決策をナンバリングして，根拠を明確にして表現できていることから，日頃の問答ゲームや各教科での取組の成果が表れていたものと考える。

○事後のアンケートで，パフォーマンス課題に対しての感想として約２割の生徒は「自分の知らない地域で，様々な特色があり，自分の身近な生活にも影響が出ている」「その地域だけでの問題ではない」と，自分のこととして捉えている。しかし，その記述には，「私」としての「実践化」につながる記述が約２割にとどまっていることから，主体的な私としての「自覚」をさせた問いやパフォーマンス課題であったとは言い切れない。

○パフォーマンス課題の評価の際に，ＡからＣのどれに該当するのか判断が難しかったものが約３割あったことから，評価の観点と基準がややあいまいな部分があったものと考えられる。

４　成果と課題

学習問題や問題解決的な学習での追究過程で思考を整理させたことは，「熟考」することに効果的であったと考える。一方，主体的な私として「立ち位置」の自覚を促し，「自分の意見や考え」をしっかりともたせるような視点の与え方や考察のさせ方，あるいは明瞭なパフォーマンス課題や評価基準の設定の見直しが必要である。また，「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの場面を工夫した自尊感情の醸成の仕方には，学びの姿を「可視化」するなどの改善の余地が多々ある。これらを今後の課題としたい。

研究（その２）

つながりを捉える社会科学習の展開

― 歴史的分野「近代の日本と世界」の実践より ―

（実践者）田中　寿佳

１　研究テーマ設定の理由

持続可能な社会を支えるためには，刻々と変化し，複雑さを増す社会情勢や国際社会に翻弄されることなく，自分自身や社会を主体的に変えていくことが必要になる。いかに変えていくのか，それは自分だけではなく，他者にとっても，今だけでなく未来にとっても「よりよい」ものでなくてはならず，その姿を思い描くことができることが，持続可能な社会を支えることにつながると考えた。自分にも他者にも「よりよい」を導くためには，他者との対話が不可欠である。対話において，互いが論理的思考力や表現力を発揮することで，互いの考えを理解しやすくなり，互いの考えのよさを活かし合った「よりよい」合意に至ることができるであろう。また，今だけでなく未来にとっても「よりよい」社会を構想するためには，現在の社会の姿を的確に把握できなければならない。そのためには複雑に絡み合う社会的事象が実際にはどのようにつながっているのかを多面的・多角的かつ総合的に捉え，何が問題の本質であるかを見抜く力が必要になる。以上のことから，他者とのつながりや社会的事象のつながりを捉えることが「よりよい」自分や社会を思い描き，持続可能な社会を支える上で大切であると考え，本研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

(Ⅰ)　問題解決的な学習の充実

時代を貫く柱となる事象を中心にして時代の特色を明らかにする学習展開を構成し，永続的な理解に到達できるような問いを設定する。

(Ⅱ)　「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

班員にそれぞれ異なった役割を与えて追究させた成果から関わりやつながりを見いださせ，時代の本質に迫るような協働的な学習形態を工夫する。

(Ⅲ)　資質・能力が育つ評価の工夫

パフォーマンス課題を設定し，ルーブリックを作成し，生徒の育ちを見取る。

３　研究の実際

(1)　生徒の実態

明治時代の特色を，「明治時代とは，○○な時代，なぜなら□□。」と表現した記述から分析すると，ほとんどの生徒が「政治」「産業」「国際関係」「文化」の四つの面すべてに共通したり，関わったりする内容が書けていた。しかし，約４分の１の生徒が書いた内容は，小学校の学習段階でも書ける内容で，仲間との協働の学びの中で新たに見いだしたつながりを活かすことはできていなかった。時代の特色を一面的でなく，多面的・多角的に考察することはできていると言えるが，さらに，仲間との学び合いにおいて思考を深め広げさせていく必要がある。

また，○○な時代と捉えた根拠を具体的な事例を用いて明確に，またはつじつまの合う文章で書けていたＡ評価の生徒は１割に満たなかった。７割弱のＢ評価の生徒は，具体的な事例は示せていないが，理由をつじつまの合う文章で書くことはできていた。Ｃ評価の２割の生徒は，○○と□□の内容がほぼ同じ，あるいは，かけ離れた文章になっていた。

以上のことから，多面的・多角的に考察することはできているが，根拠を明確にして論述する

ことはできていない生徒が多い。根拠を具体的な事例を示して論述することや，結論と根拠の整合性を吟味させる指導が必要である。

(2) 論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

(I) 時代の特色を明らかにするというねらいを達成するために，多面的・多角的に考察し，つながりを重視しなければ捉えることができない問題解決的な学習を構成する。

(II) 「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの場面において，根拠を明確に，筋道立てて分かりやすく表現することを意識して，自分の考えを伝え合わせる。また，思考を可視化することで，互いの思考をつないだり，理解しやすくしたりする。

(III) 自分の考えを伝え合う活動において，相互評価を取り入れ，相手の表現のよかった点や改善点を伝え合わせる。また，ルーブリックを作成して，論理的な思考力や表現力の高まりなどを評価する。

(3) 授業の実際

ア 指導の実際

(ア) 概 要

時代の特色を明らかにした上で，歴史を大きく捉えさせることが求められている。一つの時代を特色づける柱となるもの，言い換えるとその時代の多くの社会的事象を貫く核となるものを通してその時代を見ていくことで，時代の特色が捉えやすくなるのではないかと考え，研究を重ねてきた。「近代」では，「近代化」を柱として考察させていくこととした。学習内容のまとまりや分量，時期などを考慮し，「近代」を「明治時代」「大正時代」「終戦までの昭和時代」の三つの時代に分けた。それぞれの時代の特色を捉えさせた上で，三つの時代を総合して近代の特色を捉えさせる展開とした。「明治時代」は前年度，前研究テーマのもとで行い，「近代化」を柱として「政治」「産業」「国際関係」「文化」の相互のつながりを多面的・多角的に考察させ，特色を捉えさせた。本研究でも前研究の手法を活かしつつ，「大正時代」「終戦までの昭和時代」で，「近代化」がそれぞれどのように展開したのかを追究させ，特色をまとめさせた。そして単元のまとめとして，各時代の特色の捉えを活用して，三つの時代を貫く「近代化」を時間軸に，「近代」全体を再考察させ，「近代」はどのような時代であったかをパフォーマンス課題として表現させた。

単 元 「近代の日本と世界」（実践の中心は大正時代，終戦までの昭和時代と単元のまとめ）

単元目標

列強諸国に追いつくために近代国家を成立させた日本で，その後どのように近代化が展開したのかを「政治」「産業」「国際関係」「文化」の面とそれらの関わりから多面的・多角的に考察する。大正期には国際協調の動きや民主化，文化の大衆化の動きがあったが，その後戦争によって，その動きは逆行し，国民生活や人類に大きな被害を及ぼしたことを理解し，近代化にプラス，マイナスの両面があったことに気付く。

本質的な問い 近代化は社会や人々の生活にどのような影響を及ぼすのか。

永続的な理解

諸外国と様々な関係を築きながら，近代化は進展し，資本主義経済の成長が産業の発展を促し，生活の豊かさや国民の権利の拡大が図られ，民主政治を求める気運も高まった。その一方，資本主義経済の発展は，様々な格差や社会問題，資源の奪い合いを生み出し，戦争の要因の一つになった。戦争に向かう中で民主政治は形骸化し，生活や産業は規制され，戦争は近代化がもたらしてきた多くの恩恵を奪うことになった。近代化のプラス面だけを追求するのではなく，マイナス面に向き合い，解消する努力をしなければならない。

指導計画（全20時間）

次	学習内容	主　な　問　い
1	導　入 ○学習への見通し	①「近代国家」として成立するまでに進展した「近代化」はその後どうなるのだろうか。
2 大正時代	第一次世界大戦と日本	②　第一次世界大戦はなぜ起こったのだろうか。それまでの戦いより大きな被害を出したのはなぜだろうか。 ③　第一次世界大戦後，世界にはどのような動きが起こったのだろうか。 ④　第一次世界大戦後，日本にはどのような動きが起こったのだろうか。 ⑤　大正時代の文化にはどのような特色があるのだろうか。
	大正時代のまとめ	⑥　大正時代とはどのような時代なのだろうか。 ※詳細は３(3)ア(イ)(Ⅱ)(i)
3 終戦までの昭和時代	世界恐慌と日本の中国侵略	⑦　第一次世界大戦後，国際協調へ向かった世界が，再び戦争に向かったのはなぜだろうか。 ⑧　日本はどのように日中戦争に向かっていったのだろうか。 ⑨　日中戦争は日本や中国，朝鮮の人々の生活にどのような影響を与えたのだろうか。
	第二次世界大戦と日本	⑩　第二次世界大戦はどのように起こり，どんな展開になっていったのだろうか。 ⑪　なぜ，日本はアメリカとの戦争に踏み切ったのだろうか。 ⑫　戦時下の人々の生活はどのようなものだったのだろうか。 ⑬　日本はどのように終戦を迎えたのだろうか。
	終戦までの昭和時代のまとめ	⑭　終戦までの昭和時代とはどのような時代なのだろうか。 ※詳細は３(3)ア(イ)(Ⅱ)(ii)
4	まとめ パフォーマンス課題	◎　近代新聞社から次のような原稿依頼がありました。その指示に従って別紙の用紙に原稿を完成させなさい。 「『近代とはどのような時代であったのか』をテーマに特集号をつくります。「近代化」を柱に時代ごとに特色をまとめた学びを生かしてあなたの捉えた近代を，400字から600字で表現してください。」

(イ)　本単元における指導と評価の工夫

(I)　問題解決的な学習の充実

これまでの時代と同様に近代においても，その時代がどのような時代であったかを自分の言葉で表現できるようになることが目標であることを示した。「明治時代」の初めに，日本が「近代化」を進め，アジアでは唯一，ヨーロッパ諸国と比較しても短期間に，近代国家として成立したことに着目させ，学習問題「なぜ，日本は独立を保ち，短期間で近代国家を成立させることができたか」を設定した。それを「政治」「産業」「国際関係」「文化」の四つの面から追究していくなかでそれぞれの「近代化」を明らかにさせ，それぞれのつながりを多面的・多角的に考察させることで明治の特色を捉えさせた。

「大正時代」「終戦までの昭和時代」においては，学習の初めに，明治時代に近代国家として認められるまでに進んだ「近代化」はその後どうなるかを予想させた。生徒は「今に近づいていくから，さらに進展する」と予想した。そこで，東京大空襲の跡や集団疎開の写真を提示し，生徒の思考を揺さぶった。そして，改めて四つの面を意識して「近代化」の展開を追究していくことで，近代の時代の特色を明らかにしていこうという問題意識をもたせた。

(Ⅱ) 「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

「大正時代」「終戦までの昭和時代」のまとめの場面において，４人班の生徒一人一人に「政治」「産業」「国際関係」「文化」四つの面のうちどれか一つを担当させて追究させ，それを基に班で話し合う協働的な学びの場を設定した。自分の考えを伝える際には，「私は○○だと思います。なぜなら……だからです。」と，具体的な事例を挙げて，根拠を明確にして表現するようにさせた。また，ホワイトボードや付せん紙を使い，互いの思考やそのつながりを可視化させることで，「きょうどう」の精神を発揮させやすくした。

(ⅰ) 「大正時代」のまとめの場面

① 「近代国家が成立した明治時代の近代化の状態を50点とすると，大正時代の近代化は何点か」をそれぞれの面の担当者に考えさせた。

② 班で，それぞれの点数とその点数を付けた根拠を伝え合わせた。

③ 互いの点数・根拠を比較しながら，その妥当性について議論し，班としてそれぞれの面の点数を決定し，順位付けをさせた。

④ 班ごとに順位と点数を示させ，それを基に全体で意見交換をさせた。

⑤ ④の活動で順位が上位だったものに共通する要因を班で話し合わせた。

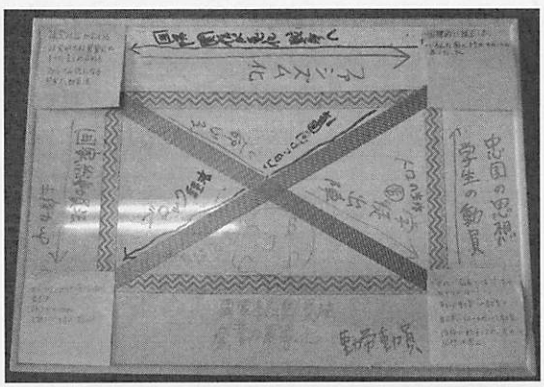
⑥ 班や全体での話合いを活かして，捉えた大正時代の特色を個人に文章でまとめさせた。

(ⅱ) 終戦までの昭和時代のまとめの場面

① 「昭和時代は近代化が進展したか，後退したか。またそれはなぜか。」をそれぞれの面の担当者に考えさせ，付せん紙にまとめさせた。

※ 産業面で各クラス一人ずつの生徒が軍事産業が伸びたことを理由に進展したとしたが，それ以外の生徒は後退したとしていた。

② 班で，右のホワイトボードにように，①で各自がまとめた付せん紙を四つの端に貼らせ，これを用いて互いの考えを伝え合わせた。



四つの面のつながりを可視化

③ それぞれの面のつながりや影響し合っていることをホワイトボード上に書き込ませ，可視化させた。

④ そのつながりを総合的に見て，すべてに関わる近代化が後退（または進展）した要因は何かを班で考察させた。

⑤ 班ごとに④について発表させ，全体で意見を集約していった。

⑥ 班や全体での話合いを活かして，捉えた終戦までの昭和時代の特色を個人に文章でまとめさせた。

(Ⅲ) 資質・能力が育つ評価の工夫

各時代の特色をまとめた文を生徒同士で読み合わせ，根拠が具体的に何を指しているかが分かる文章か，特色と根拠に整合性があるかを互いに評価し，アドバイスをさせ合った。

「近代」のまとめで，自分が捉えた近代の時代像を現在の新聞に寄稿するという設定のパフォーマンス課題に取り組ませ，作品を永続的な理解への到達と論理的な思考力・表現力の高まりの二つに分けてルーブリックを作成して評価した。

イ　生徒の学びの実態

[永続的な理解に至っているかを見取るルーブリックと結果]

A	B	C
近代化のプラス面・マイナス面の両方が書けている。また，戦争によって近代化が後退した内容が書けている。	近代化のプラス面・マイナス面の両方が書けている。	近代化のプラス面・マイナス面のどちらかしか書けていない。
50%	29%	20%

８割の生徒は近代の「近代化」をプラス・マイナスの両面から捉えることができていた。Ｃの生徒について分析すると，「終戦までの昭和時代」の視点が抜けていた生徒がほとんどであった。なお，これらの生徒は，「終戦までの昭和時代」だけの特色をまとめた際には，「戦争」との関わりから近代化が後退したことを捉えた記述内容であったが，それを活かせていなかった。時間内に書き切れなかった生徒（約１割）もいたが，「近代化」という軸を活用しなかった生徒の中に三つの時代の特色を一つに総合することが難しかった生徒が多い。

[論理的な思考力・表現力の高まりを見取るルーブリックと結果]

A	B	C
自分が捉えた近代の特色を書いていて，その根拠を複数の視点から明らかにしている。次の①・②の少なくとも一方は満たしている。 ①根拠の具体的事例を示している。 ②特色と根拠に整合性があり，それが端的に示されている。	自分が捉えた近代の特色を書いていて，その根拠を複数の視点から明らかにして書いている。また，特色と根拠に整合性がある。	自分が捉えた近代の特色を書いているが，根拠が一面的である。または特色と根拠に整合性がない。
47%	34%	19%

Ｃの生徒が約２割いたが，根拠が一面的であった生徒はおらず，全員が特色と根拠に整合性がなかった。その主な原因として考えられるのが，結論である特色の捉えの部分に複数の内容が書かれていることだ。例えば，「近代は，戦争を通じて外国との関わりが深まり，国民全体が国が示す方向へ向かった時代だと思う。」と捉えた生徒はこの根拠を示すために，多面的に様々な事象を盛り込みすぎ，結果的には，つじつまが合わなくなってしまっていた。このことは，Ｂと評価した生徒にも言えることで，特色と根拠に整合性は見られるが，文章が複雑で，一見しただけでは分かりにくいものがあった。全体としては，明治時代の特色のまとめでの実態調査時と比べると，根拠を具体的に示して論述したり，根拠を端的に分かりやすく表現したりできる生徒は増加した。しかし，集約する範囲が増えたとはいえ，Ｃ評価の生徒が多いことは大きな課題である。

私は近代とは戦争によって前進し，戦争によって後退した時代であったと思います。理由は三つあります。

一つ目に，明治時代です。開国し，外国に追いつこうと政府は近代化政策をおし進めました。そして，日清・日露の戦争の勝利から世界にも認められる近代化をとげました。

二つ目に，第一次世界大戦による大戦景気です。この好景気により日本の産業は発展しました。

三つ目に，太平洋戦争です。国家総動員法により，国民は軍のために全面的な協力を求められました。普及していた雑誌やラジオ放送は戦意を高めるために利用され，文化は発展しませんでした。また，米軍の空襲により町は破壊され，近代化はほとんどなくなりました。

これら三つの理由から，私は近代とは戦争によって前進し，戦争によって後退した時代だと思います。

実際の生徒の作品（どちらもＡ評価）

ウ 考 察

(1) 問題解決的な学習の充実について

「明治時代」の学習では，時代の特色に迫るために追究する学習問題と問いを単元の最初に明確に示すことができたが，「大正時代」「終戦までの昭和時代」の学習では，「近代化がその後どうなっていったのだろうか」というあいまいな学習問題で，生徒の課題意識を高めるには弱かった。永続的な理解に至るためには何を理解させておかなくてはならないか，逆向き設計を意識して問いを構成したが，同時に生徒が最初にもった課題意識を単元を通してもち続けることができる単元構成でなくてはならないと感じた。学習問題・問い・永続的理解が正・逆どちらからもまっすぐつながる単元構成になっているかをよく吟味する必要がある。

(2) 「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

各時代のまとめで，班で担当者を決め，協働的な学習形態の学び合いの場面を設定することで，仲間の学びと自分の学びをつなげて総合的に考察することや，比較したり共通点を見いだしたりして考察することが身に付いてきた。特に本研究から，学校全体で高めている論理的な思考力や表現力を意識させることで，自分の考えを伝えるときに，結論を先に述べ，理由をナンバリングを用いて伝えることが自然にできるようになってきた。自分と相手の思考が整理されているため，相手の考えも分かりやすく，つながりを見いだしやすくなった。また，何を相手に質問すれば，話合いが深まるのかポイントが絞りやすくなったため，学び合いの質は高まったと言える。

(3) 資質・能力が育つ評価の工夫

今回のパフォーマンス課題に対する二つのルーブリックはどちらも「思考・判断・表現」を見取るものにした。永続的な理解に至っているかの見取りはA評価でも，論理的な思考力・表現力の見取りではCの生徒がいたり，その逆の生徒もいたりしたので，生徒の育ちを細かく見取ることができたのではないかと思う。しかし，ルーブリックの妥当性や他の観点をいかに見取るかなど研究を進めていく必要がある。

「近代化」を柱に問題解決的な学習を構成し，現代の人々が読む新聞に掲載するというパフォーマンス課題にしたことで，さらなる近代化が進行する現代に生きる人々に，近代の学習の学びを活かすための提言が表出されると考えていた。しかし，課題に明記していなかったことで，「近代化は，生活が便利になる一方，様々な問題を残して成長してきた。その問題にどう対応して発展させていくかがこれからの日本の課題だと考える」などと書いていた生徒もいたが，数人に留まってしまった。パフォーマンス課題をしっかり吟味していれば，よりよい社会を構築する力の育ちも見取ることができたのではないかと反省している。

4 研究の成果と課題

問題解決的な学習，生徒の学び合い，パフォーマンス課題による育ちの見取りはどれも生徒の資質や能力を高めることに有効であることが分かった。しかし，これらは単独ではなく，①パフォーマンス課題までを見通して単元を貫く学習問題を設定する。②それを解決するための質の高い問いを構成する。③問いをきょうどうの精神を発揮する学び合いによって追究させる。④その過程で身に付けた知識や見方や考え方などを総動員してパフォーマンス課題に当たらせる。⑤ルーブリックを用いて評価する。という一連の活動の中に適切に連動させてこそより効果を発揮すると感じた。また，論理的な思考力や表現力を教育活動全体で育てていることが，社会科の授業においても発揮され，対話的な学びに近づいているので，今後も相乗効果で高めていけるようにしたい。

研究（その３）

あるべき姿を求める歴史学習の創造

―歴史的分野「なぜ，日本人は再び戦争へと向かったのか」の実践より―

（実践者）宮本　真人

１　研究テーマ設定の理由

「過去」のできごとを扱う歴史的分野の学習において，「現在」と「将来」の二つの視点を軸にして論じられる「持続可能な社会」の形成に資するためには，「過去の事実の分析や解釈を通して現代の社会の特色や現在の自分の立ち位置を認識し，それを踏まえて未来社会を予見し構想できる力」が育つ授業展開が重要だと考える。このためには，歴史的事象や問題の背景を思考し，それを基にして，当時の社会的な問題や課題の最も有効な解決策や目的を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定するなど，当時の「あるべき姿」について社会的な判断を求める学習が必要であると考えた。このような学習においては，論理的に思考し表現する生徒同士の学び合いを通してこそ，より多面的・多角的に捉えさせることができ，そのことが「よりよさ」を志向することにつながると考える。以上のような，過去を映し鏡に，現代社会の特色が分かり，持続可能なよりよい社会に向けた構想ができることを想定した学習を積み重ねさせることにより，教科領域研究テーマに掲げた力を育成できると考え，個人研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

本年次は，次の「研究の内容及び方法」により，研究テーマの具現化に迫ることとした。

(Ⅰ)　問題解決的な学習の充実
　ア　持続可能な社会づくりに活きる学習内容の研究・吟味
　イ　知識や概念を持続可能な社会の形成に資するものに拡大させる学習指導方法の工夫
(Ⅱ)「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実
　ア　すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫
　イ　他者からの学びを促進する学習指導方法の工夫
(Ⅲ)　資質・能力が育つ評価の工夫
　ア　「逆向き設計論」に基づく指導計画や評価計画の立案
　イ　単元の学びを包括できるパフォーマンス課題及びルーブリックの検討

３　研究の実際

(1)　生徒の実態

本実践対象学級の生徒（78名）は，前単元のまとめの問いである「日本の民主主義（大正デモクラシー）はどのように高まったのか」について，大正時代の光と影の部分を捉えながら，根拠を挙げて論理的に記述できた生徒が65名いた。残り13名は一面的な記述であったり，結論と根拠が食い違っていたりしたものの，他者との学び合いを通して，最終的には論理的かつ多面的・多角的に考察し表現することができた。しかし，本単元前に「国際協調の時代であり，デモクラシーの風潮が高まっていたにもかかわらず，なぜ，日本人は，再び戦争に向かったのか（予想）」では，小学校で学習した日華事変，日中戦争，太平洋戦争などの言葉を知っているものの，それらから予想を構成し，その根拠をある程度論理的に表現できた生徒は８名しかいなかった。ここから分かることは，個別の知識がまとまりのある真の理解には結び付いていない生徒の状況と，知識が不足していたり，事象間のつながりを明確に捉えられていなかったりする場合，歴史的事象の原因と結果について「論理的に思考し表現する」ことはできないということである。以上から本実践では，個別の事象について表面的な事実を知ることのみに終始しないよう留意することが大切だと考えた。また，生徒は全員，現代のテロや紛争を肯定的に捉えることはなく，国際平和の実

現に努めることの大切さを認識していた。だからこそ,「なぜ,日本人は戦争に向かったのか」や「戦争を回避するためにはどうすればよかったのか」の追究では,感情論ではなく,当時の社会状況を科学的に追究させ,思考の過程や結果を生徒同士が論理的に表現し合う中で,見方や考え方を広げ深めさせなければならないと考えた。

(2) 論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

「事象や問題の背景を熟考(時間的・空間的な視点をもって,多面的・多角的に考察)し,自分の意見や考えをもち表現する力」(本校社会科で捉えた論理的に思考し表現する力)を発揮させ高めるために,次の点に留意した。

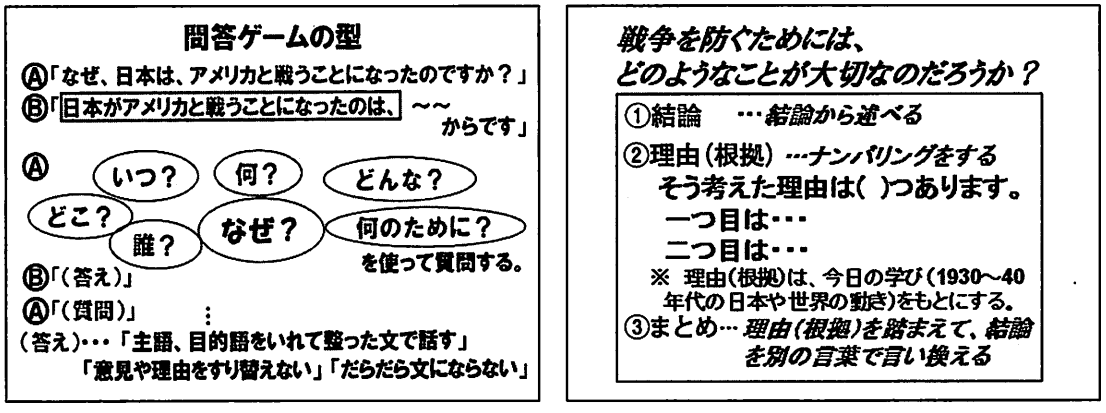
ア 「熟考」できる質の高い問いの設定

本単元では次のように,単元を貫く学習問題を設定し,その解決に迫るために理解深化課題(P73(イ)(I)イ参照)を次のように設定した。

○ 本単元を貫く学習問題
「なぜ,日本人は再び戦争に向かったのか」
○ 本単元各次での理解深化課題
第一次:「なぜ,世界恐慌で各国の対応は異なったのだろうか。」
第二次:「なぜ,日本と中国の関係は悪化したのだろうか。」
第三次:「太平洋戦争へと向かうターニングポイントとなったできごとは何だろうか。」
「なぜ,太平洋戦争が『明るい』や『爽やかだ』と表現されたのだろう」

イ 言語技術教育の手法を活用した思考・表現の場面の設定

生徒同士の学び合いが,「論理的に思考し表現し合う学び合い」となり,一人一人の見方や考え方を効果的,効率的に広げ深めさせられるよう,スピーチや問答ゲームの「型」を授業で随所に活用して思考・表現させた。併せて,ワークシートやホワイトボードの活用方法を工夫することにより,互いの思考を可視化したうえで,外的リソース(頭の外の資源)を活用して,思考を深めさせたり,他者に効果的に表現する方略について工夫した。



言語技術教育の「型」を生かした思考・表現の例(本実践第6時の例)

(3) 授業の実際

ア 指導の実際

(ア) 概 要

単 元 第二次世界大戦と日本 ―なぜ,日本人は再び戦争へと向かったのか― (全10時間)

単元目標
軍部の台頭から戦争までの経過と,大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解し,国際協調と国際平和の実現が大切であることに気付く。

本質的な問い

なぜ，戦争は起こるのか。どうすれば戦争は防げるのか。

永続的な理解

第二次世界大戦は，ベルサイユ体制のもとでの植民地支配の継続，民族至上主義による多民族の迫害，世界恐慌からくる経済的社会不安，仮想敵国を想定した同盟や条約が複雑に結び付いて起こり，人類全体に惨禍を及ぼした。それは現代の国際関係にも影響を及ぼしている。私たちは，国際協調と国際平和の実現を誠実に希求し，全世界の人々が等しく恐怖と欠乏から免れた持続可能な社会の実現に主体的に参画することが大切である。

評価目標と評価方法

評価目標	評価方法
① 第二次世界大戦による惨禍など，近代の歴史的事象に対する関心を高め，学習問題「日本人はなぜ再び戦争に向かったか」を意欲的に追究しようとし，国際協調の大切さを考えようとする。（関心・意欲・態度）	**◎パフォーマンス課題** ・あなたは平和を守るための調査や研究をしている政治学者です。20世紀に入り色々なところで戦争が起こる世になりました。第一次世界大戦，第二次世界大戦と規模が大きく犠牲も多く出た二度の世界大戦が起こったため，世界に向けて，「なぜ，戦争は起きるのか？ どうすれば防ぐことができるのか？」について提言することになりました。国際シンポジウムのパネリストとして意見交換した上で，提言レポートをＢ４・１枚にまとめなさい。（①②③） ○ワークシート（①②③） ○ペーパーテスト（③④）
② 学習した内容を活用し，その比較や関連付け，総合などを通して，軍部の台頭から戦争までの経過や平和な社会を構築するための大切な事柄について多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。（思考・判断・表現）	
③ 学習問題やパフォーマンス課題の解決に関して，収集した資料から有用な情報を適切に選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。（資料活用）	
④ 軍部の台頭から戦争までの経過と，大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解し，その知識を身に付けている。（知識・理解）	

指導計画（全10時間）

次	学習内容	◇評価規準	時間
1	各国の世界恐慌への対応 ○アメリカの動き ○ブロック経済とファシズム	◇なぜ，世界が再び戦争に向かったのかについて興味をもち，その背景を捉えようとする意欲が高まっている。（関心・意欲） ◇欧米諸国では，世界恐慌に対してどのような政策がとられたかを調べ，その問題点をまとめている。（資料活用）	2
2	日本の中国侵略 ○行き詰まる政党政治 ○日本の中国侵略 ○日中戦争	◇日中戦争開戦に至る経緯について理解している。（知識・理解） ◇日中戦争が中国や朝鮮，日本の人々にどのような影響を及ぼしたかについて調べ，まとめている。（資料活用）	2
3	第二次世界大戦のはじまり ○第二次世界大戦 ○太平洋戦争 ○戦時下のくらし ○戦争の終結	◇第二次世界大戦や太平洋戦争の原因や経過について理解している。（知識・理解） ◇日米開戦までの経過を振り返り，戦争を回避できた時点を自分なりに判断し，その理由を表現している。（思考・判断・表現） ◇戦争による国民生活の変化や戦争が現代に及ぼす影響などを踏まえ，戦争反対を訴えるスピーチ原稿を作成している。（資料活用）（関心・意欲・態度） ◇学習問題を多面的・多角的に考察し，その過程や成果を適切に表現している。（思考・判断・表現）	4
4	パフォーマンス課題 ○課題追究 ○模擬国際シンポジウム	◇模擬国際シンポジウムで，説得力のあるスピーチを行っている。（関心・意欲・態度）（思考・判断・表現） ◇パフォーマンス課題を意欲的に追究し，多面的・多角的に考察して，根拠を基に資料をまとめている。（関心・意欲）（思考・判断・表現）（資料活用）	2

(イ) 本単元における指導と評価の工夫

(I) 問題解決的な学習の充実

ア 持続可能な社会づくりに活きる学習内容の研究・吟味

戦後70年を超えた現在，若い世代ほど過去の戦争の歴史について，自分なりに納得のいく認識をもち，「継承すべき戦争の責任」を課しながら世界と接していくことが求められる。戦争に至る経緯，その時期に日本が歩んだ道についての実感を獲得することは，次代の国際社会を担う生徒にとって不可欠なものであると言える。また，戦争について学習することは，平和で民主的な国家・社会の形成者として「よりよい社会」を構想し行動できる人間を育てるために最も重要な要素であると言える。特に市民を含む数千万人の犠牲者を出したと言われる第二次世界大戦は，人類史上最も悲惨な戦争であり，平和を希求し，民主的な「よりよい社会」を創造する態度を育てるためにも，学ぶ意義は極めて大きい。本単元は，ナチスドイツの侵略から始まる。日本は軍部の台頭や日中戦争の泥沼化からドイツと同盟を結ぶことに活路を求め，米英と対立を深め最終的に太平洋戦争開戦，原爆投下，敗戦へと歩んでいく。本単元では，この歴史的経緯を「日本人はなぜ再び戦争へと向かったのか」の学習問題のもとに理解させようと考えた。また，「戦争を回避するためには日本はどうすればよかったのか」を思考させることにより，現在及び将来の「よりよさ」を構想することにつながり，教科領域研究テーマの具現化に資することができると考え単元構想を立てた。

イ 知識や概念を持続可能な社会の形成に資するものに拡大させる学習指導方法の工夫

本単元の目標を達成するためには，大正デモクラシーの風潮が盛り上がっていた我が国が，再び戦争に向かった要因の究明に向けた課題意識を高め，主体的に追究しながら，実感を伴った理解に導く必要がある。そこで，この時代に生きた人物の思いや考えを引用しながら，単元の学びを構成した。また，毎時の学習は，より深い理解を得られるよう「教えて考えさせる授業」（市川伸一氏）で提唱される学習過程を参考にし，当時の社会の状況を捉えるための問い①（理解確認課題），理解したことを活用し深化させるための問い②（理解深化課題）を柱に構成した。さらに終末場面では，授業で学んだ過去と今に生きる生徒自身をつなぐ問い③（振り返りの問い）を思考させることを基本とした。例えば，以下の通りである。

問い① なぜ，日本はアメリカと戦うことになったのだろうか。（理解確認）
問い② 太平洋戦争へと向かうターニングポイントとなったできごとは何だろうか。（理解深化）
問い③ 戦争を防ぐためには，どのようなことが大切なのだろうか。（振り返り）

主題名「太平洋戦争」（本実践６時間目）での問いの構成

上記のような問い①～③の追究を通して，習得した個別の知識が互いにどのような時間的・空間的な関係性をもっているのか，あるいはそれらが全体として，戦争に向かったという時代状況をどのように形成しているのかが十分に理解できるよう工夫した。このことにより，生徒が持続可能性への志向を価値として認識できると考えた。また，毎次の導入では，関連する現代の課題を提示することにより，各時間に学ぶ過去と今に生きる生徒自身をつなぐとともに，本単元で習得した知識や概念を持続可能な社会の形成に資するものに拡大させることができると考えた。

(II) 「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

ア すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫

生徒が互いに顔を見合いながら，また，思考の状況を確認し合いながら学習を進められるよう，各授業の前半部はコの字型の座席配置による全体学習を中心に進めた。その際，適宜ペア学習を取り入れ，互いの意見を聞き合いながら考えを練り合い，発表する場面を設けた。授業の後半部では，問い②について，グループで練り合い高め合う場面を設けた。各自の考えを基にしてグループ学習を進めさせることにより，すべての生徒が自分の考えを広げたり深めたりできると考えた。コの字型の座席配置やペア及びグループ学習の最大の利点は，言語情報のみならず非言語情報（表情やしぐさなど）をも，互いに確認し合いながら生徒の学び合いが成される点にある。自分の思考・判断の過程や成果が，他者にどのように伝わっているのかをリアルタイムで認識できる状況での学びこそが，自尊感情を醸成し合う「きょうどう」の精神を発揮する学びには欠かせないものであると考えた。

イ　他者からの学びを促進する手立ての工夫

問い①の追究場面においては，理解している生徒が，理解が不十分な生徒に対して，納得するように工夫して説明させたり，理解が不十分な生徒が，何とか理解しようという意識で他者の説明を聞かせるといった，「共同」の精神を発揮する学びを構成した。問い②の追究場面においては，お互いに納得するまで話し合わせる中で，当時の社会状況についての見方や考え方がより社会的に育つことを意図して「協同」の学びを構成した。つまり，本実践における「共同」の学びとは，共に同じ結論に至るよう努力し合う学び合いを指し，「協同」の学びとは，他者と協力して自分も相手も納得できる「よりよい」解や解釈を導き出す過程における学びを指す。これらにおいては，問答ゲームやスピーチの型を活用しながら，意見交換をさせたり，意見カードやホワイトボードを活用して，個人やペアでまとめた意見を，適宜小集団や全体に提示させながら学習を進めた。これにより，各自の論理的な思考を促すとともに，効率的に多様な考えに触れさせることができ，「きょうどう」の学びが促進されると考えたからである。



コの字型の学習形態／ホワイトボードの活用

(Ⅲ)　資質・能力が育つ評価の工夫

ア　「逆向き設計論」に基づく指導計画や評価計画の立案

研究テーマを具現化を念頭に，本単元の構想を立案するに際して「逆向き設計論」に基づくテンプレート（次頁）を活用し，本単元における「本質的な問い」と「永続的な理解」を構想し，評価計画及び指導計画を立案した（P71～72参照）。「逆向き設計論」は，カリキュラム設計に当たって，教育目標，評価方法，学習経験と指導を三位一体のものとして設計することを提案するものである。「逆向き」と呼ばれる所以は，中学校での教育によって最終的にもたらされる成果から翻って教育を設計する点にあり，通常，指導が行われた後で考えられがちな評価方法を先に構想する点にある（西岡加名恵氏）。この「逆向き設計論」に基づいて指導計画を立案することにより，長期的な視野に立って，「よいよい社会や自分の姿を思い描く力」及び「事象や問題の背景を熟考し，自分の意見や考えをもち表現する力」の育成に確かに迫る単元の学びを目指した。

イ　単元の学びを包括できるパフォーマンス課題及びルーブリックの検討

生徒の実態や教師の教材観・指導観に基づき，パフォーマンス課題を設定した（P72評価方法参照）。このパフォーマンス課題の追究やその前段階として作成・活用した模擬シンポジウムのスピーチは，生徒の確かな社会認識が育つとともに，これからの「よりよい社会や自分」を志向することに直結するものであると考えた。また，本パフォーマンス課題の設定に際して留意したことは，その課題の追究において，「論理的思考力が発揮される」「資料活用力が必要とされる」「多面的で個性豊かな表現が引き出される」「単元の学びの意義を感じることができる」ことであり，当然のことながら，「よりよい社会や自分の姿を思い描く力」及び「事象や問題の背景を熟考し自分の意見や考えをもち表現する力」が育成されることである。これを踏まえて，パフォーマンス課題の「目的」・「役割」・「相手」・「状況」・「観点」を以下の通り設定した。

○何がパフォーマンスの目的か－「戦争の原因を明らかにし，予防策を提言する」
○学習者が担う役割は何か－「平和を守るための調査研究をしている政治学者」
○誰が相手か－「平和を求める世界の人々」
○想定される状況は何か－「第二次世界大戦後の国際シンポジウム」
○生み出すべき作品は何か－「提言レポート　Ｂ４版１枚」
○評価の観点は何か－因果関係を捉える思考力　　多彩な資料を適切に活用する力

なお，このパフォーマンス課題におけるルーブリックは，(P79) の通りである。

逆向き設計テンプレート

教科領域名 社会　　指導者　宮本　真人

(a)研究テーマ(育成したい持続可能な社会を支える資質・能力)
よりよい社会や自分の姿を思い描く力の育成
(b)教科領域で育成すべき「論理的に思考し表現する力」
事象や問題の背景を熟考して自分の意見や考えをもち、その根拠を明確にして表現する力
※熟考・・・時間的・空間的な視野をもって、多面的・多角的に考察すること
単元名： 近代の日本と世界(カ) なぜ、日本人は再び戦争へと向かったのか (3年)　　時数:全10時間
実施時期:平成28年5月下順

第一段階:求められている結果

本単元(1学期)における設定されている目標:　【G】goals

(a) 研究テーマに対して:

平和で民主的な持続可能な社会の実現に主体的に参画することが大切であることに気付く。

(b)「論理的に思考し表現する力」に対して:

様々な資料を活用して、第二次世界大戦の原因と人々に及ぼした惨禍について熟考し、他者に分かりやすく説明できる。

理解:　【U】understanding	本質的な問い:　【Q】questions
第2次世界大戦が、ベルサイユ体制のもとでの植民地支配の継続、民族至上主義による他民族の迫害、世界恐慌からくる経済的社会不安、仮想敵国を同盟や条約が複雑に結び付いて起こった。それは現代の国際関係にも影響を及ぼしている。私たちは、国際協調と国際平和の実現を希求し、全世界の人々が等しく恐怖と欠乏から免れた持続可能な社会の実現に主体的に参画することが大切である。	なぜ、戦争は起こるのか。 どうすれば戦争は防げるのか
生徒は次のことを知る　【k】knowledge	生徒は次のことができるようになる　【S】skills(a)
この時期の、 ・経済の世界的な混乱と社会問題の発生及び社会不安の広がり ・我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係 ・欧米諸国の動き ・戦時下の我が国の国民生活 ・第二次世界大戦、太平洋戦争が現代に及ぼす影響 について理解する。	(a)について ・なぜ、戦争は起こるのかについて、興味や関心をもつ。 ・国際協調と国際平和の実現を求めるようになる。 ・全世界の人々が等しく恐怖と欠乏から免れた持続可能な社会の実現に主体的に参画しようとする意識をもつことができる。 ・歴史的事象を根拠にした、戦争を防ぐための手段について、自分の考えをもつことができる。

生徒は次のことができるようになる　【S】skills(b)
(b)について
・第一次世界大戦、日中戦争、太平洋戦争までの経過を追究し、その比較や関連付け、総合などを通して、戦争が起こった原因について多面的・多角的に考察できる。

第2段階:評価のための証拠

(a)に対して　【T】tasks (a)	他の根拠　【OE】other evidence(a)
パフォーマンス課題:あなたは、平和を守るための調査や研究をしている政治学者です。二度の世界大戦が起こったため「なぜ、戦争は起きるのか、どうすれば防ぐことができるのか」について提言することになりました。国際シンポジウムのパネリストとして意見交換した上で提言レポートを作成しなさい。	・「世界恐慌に対する、各国の対応についての問題点」の記述 ・「戦争を防ぐためにはどのようなことが大切かについて話し合い、自分の考えをまとめよう」についての考察
(b)に対して　【T】tasks (b)	他の根拠　【OE】other evidence
・「なぜ、世界恐慌で各国の対応は異なったのか」 ・「なぜ、日本と中国の関係は変化したのか ・「なぜ、日本人は再び戦争に向かったのか」 ・「なぜ、太平洋戦争が『明るい』などと表現されたのか」 これらの問いについて、様々資料を根拠に熟考し、その追求の過程や結果を他者に分かりやすく表現しよう。	・模擬国際シンポジウムでのスピーチ原稿、討論の様子 ・太平洋戦争へと向かうターニングポイントの考察

第3段階　学習計画

1 学習問題「なぜ日本人は再び戦争に向かったのか」について予想をもつ。
2 世界恐慌に対する各国の対策について調べ、その背景を追究し、問題点をまとめる。
3 日中経緯に至る経緯について調べ、他者に説明する。
4 日中戦争が中国や朝鮮、日本の人々にどのような影響を及ぼしたかについて調べまとめる。
5 第2次世界大戦や太平洋戦争の原因や経過を捉える。
6 日米開戦までの経緯を振り返り、戦争を回避できた時点を判断する。
7 戦争による国民生活の変化について調べる。戦争が現代に及ぼす影響について考察する。
8 学習を振り返り、学習問題について考察し、発表し合う
9 模擬国際シンポジウムでスピーチや意見交換を行う。
10 パフォーマンス課題についてまとめる。

イ　生徒の学びの実際（6／10時間）

(ア) 主　題　　太平洋戦争へと向かうターニングポイントを捉えよう

(イ) ねらい

○日本の南進政策が太平洋戦争の要因となったことを理解する。

○戦争を回避できた時点を自分なりに判断し，その理由を根拠を挙げて説明する。

(ウ) 展　開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ・生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　日米開戦に踏み切った政治担当者の思いを知る。 （一斉）	5	○子どもが戦争に参加したり，テロを起こしたりするのには，どんな理由があるのだろうか。 ・宗教や政治の対立 ・貧困からの脱却 ○山本五十六は，何を守るために日米開戦に踏み切ったのだろうか。 ・日本人の安定した暮らし ・日本の国際的地位	○歴史を学ぶ意味を感じさせるため，本時の学習内容と結び付く現代の社会的事象を取り上げた。 ○当時の日本の状況に思考を及ぼさせるため，山本五十六の言葉を映像を活用して紹介した。
問い①理解確認課題	なぜ，日本はアメリカと戦うことになったのだろうか		
2　問い①について考察し，学級全体で結論を導く。 （個人） →（ペア） →（全体）	10	・援蒋ルートを断ち切り，日中戦争や南進政策を有利に進めようとしたから ・アメリカを中心とするＡＢＣＤ包囲陣を打ち破るため	**○日米開戦の背景を全員に納得させるために，ホワイトボードやコの字型の座席の利点を活かした。【共同】** ◇日本の「南進政策」をキーワードに説明をまとめている。 （ワークシート）
問い②理解深化課題	太平洋戦争へと向かうターニングポイントとなったできごとは何だろうか		
3　問い②について判断したことを基に話し合う。【協同】 （個人） ↓ （小集団） ↓ （全体）	18	結論 ・私は満州事変だと考えます。 理由・根拠 満州事変を契機に，軍部の政治的発言力が増大し，日本は中国侵略を押し進めた。このことが日米対立の要因となっているからです。	**○自他の異同を明確にしながら論理的に思考し表現する学び合いを促進させるため，班で結論を一つにまとめさせる際，全員に問答ゲームの型で表現させた。【協同】** ◇当時の社会状況を踏まえた上で，問い②について自分なりに判断し，根拠を挙げて説明している。（ワークシート）
4　当時の在るべき日本の姿を構想する。 （小集団） ↓ （全体）	10	○日本はその時どうすればよかったのだろうか。 ・国民が軍部に反対する世論を形成すればよかった。 ・第３次護憲運動のようなものを展開すればよかった。	**○当時の状況を踏まえて，論理的に思考させるために一分間スピーチの型で思考させ表現し合わせた。【協同】**
問い③振り返り	戦争を防ぐためにはどのようなことが大切なのだろうか		
5　本時の学びを振り返る。 （個人）	7	○本時の学びを踏まえて，現代社会で起こる戦争や紛争を防ぐためにはどのようなことが大切なのかまとめよう。	○本時の学びが現代の社会への理解につながるよう，また，自己の成長を認知できるよう，本時の学びから根拠を見いださせた。

ウ 考 察

(I) 問題解決的な学習の充実

授業参観者（第６時間目を参観）より

○単元の学習問題が設定されているので，見通しをもって学習が進められている。本時のみならず，各次の理解深化課題の追究が，自ずと単元の学習問題の解決に迫ることのできる問いの構成になっていると考えられる。現代及び未来の社会認識を形成する意味では，導入時に本時に関連する現代社会の課題を提示することは効果的であると考える。

○単元の学習問題が示されているので，本時の問いについて十分な知識をもって，それを活用しながら追究できていた。

○授業において，生徒の発言に対して，「なぜ？」「つまり？」「例えば？」などと効果的に教師が働きかけていたため，時間的・空間的な認識のもと論理的に思考することができており，生徒の考えをさらに深めていく（よりよい未来づくりに活かせる歴史認識の形成につなげる）ことができていた。

○導入から展開に至るまで，発問方法，テンポ，生徒の発言の取り上げ方など，思考を広げたり深めたりすることに効果的であった。また，「歴史」を学ぶことにより現代や未来について考える生徒の姿が印象的であった。日頃の積み重ねの成果を感じる。

生徒のアンケートより（以下の数値は生徒78名の平均値を示す。５段階評価最高値５）

項目①　単元を通して，自ら意欲をもって積極的に授業に取り組んだ（4.65）
項目②　単元の学びは，とても興味の引く学習内容であった（4.42）
項目③　日本がなぜ，再び戦争をしたのかだいたい分かった。(4.57)
項目④　単元の学びからから私たちの社会に活かすべきことが見いだせた（4.59）
※　項目①～④において評価を「２」以下とした生徒はいなかった。

参観者の意見生徒アンケート及びワークシートの記述から「時代の特色の理解や現代認識」のみならず「持続可能な未来構想」につながる，問題解決的な学習が展開できたと判断している。また，昨年度，課題として掲げた教師のコーディネートについても，研究のねらいに迫る観点から，生徒の意見をコーディネートできていたと判断できる。

(II) 「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

授業参観者（第６時間目を参観）より

○問答ゲームやスピーチの型を使って個人が問いに迫っていくことについては，大変効果があったと思う。特に問答ゲームやスピーチの前にとった個人での思考の時間（１分間）にて，要点となる根拠を選択して論理的に思考し表現することができていた。

○四人グループのうちの二人が問答ゲームを行って，もう二人がそれを見ておく小集団学習の手法は，よりよい表現に練り上げたり，見方や考え方を広げたり深めたりするのに効果が高いと感じた。

○ホワイトボードをうまく活用してペア活動やグループ学習が効果的になされていた。それぞれの問いの追究に応じた学習形態により，質の高い学び合いが進められていた。

●問答ゲームの際に相手の考えを引き出そうとしているか疑問に感じる質問者もいた。相手の話したことを相手や他者にフィードバックする機会を入れると，よりペアでの対話が充実すると感じた。

●問答ゲームにおいては質問者の力量がその活動自体の質を大きく左右させる。質問者側の力量を高めることはもちろんのこと，話合いの視点や役割を明確にすることも大切であろう。また，他のペアの問答ゲームを聞き取る際にも，聞き取る際の視点を明確にしたほうがよい。その視点のもたせ方により，論理的のみならず批判的思考力や創造的思考力の育成にも発展していくと感じた。

生徒のアンケートより（第２，４，６時のアンケートの対象クラス全員の平均値）

項目⑤　この時間の，他者との関わり合いは楽しかった。(4.68)
項目⑥　この時間に，友達との関わり合いの中から自分の成長に役立つ学びを得た（4.75）
※項目　⑤・⑥において評価を「２」以下とした生徒はいなかった。

コの字型の学習形態，ペアやグループでの学習は，生徒から「できるだけ多く」との要望が多く，生徒はこれらの楽しさも有用性も感じている。今後もこれらの活動を継続して取り入れ，すべての生徒が他者とともに学ぶ楽しさを味わい，個々の学びを深め，そして「すべての生徒が伸びる」ことのできる「きょうどう」の精神を発揮する学びをデザインしていきたい。また，問答ゲームやパラグラフによるスピーチの型を活用させたことも，「論理的に思考し表現する」ことに有効であった。

(Ⅲ)　資質・能力を高める評価の工夫

本単元の終末で取り組ませたパフォーマンス課題についてまとめたレポート（下）を次ページのルーブリックに従って評価した。二つの観点についてCと評価せざるを得ない生徒（３名）が存在することが大きな課題として挙げられる。これらの生徒は，パフォーマンス課題のみならず，各授業において，一つの資料中の解説等をそのまま自分の言葉として論述している場面が多く見られる傾向があることが分かった。つまり，単元を貫く学習問題を多面的・多角的に追究することができておらず，それが，パフォーマンス課題の取組にも現れたということである。これは，教師が「逆向き設計テンプレート」を作成したものの，「何ができるようになるか」についての指導と評価が十分ではなかったことを意味する。「何ができるようになるか」について，単元を通して指導と評価をさらに充実させ，そこで習得されたものが発揮できるパフォーマンス課題に取り組ませることに留意しなければならない。


なぜ戦争は起きるのか。
～世界の戦争時代に見る原因～
〈戦争の歴史〉
実際、戦争とはどのようなことで起こったのか。すべて日本で見てみる。（戦争には、何で起こったのかが（ ）内）
1894年 日清戦争（朝鮮の争奪→領土拡張）
1904年 日露戦争（朝鮮支配をめぐる）
1914年 第一次世界大戦（バルカン半島をめぐって）
1919年 3・1独立運動
5・4運動（ベルサイユ条約の改定）
1925年 治安維持法公布
1929年 世界恐慌
1931年 柳条湖事件、満州事変（満鉄の爆破）
（中国からの満州の分離）→国際連盟脱退
1932年 5・15事件
1936年 2・26事件
1937年 盧溝橋事件→日中戦争
1939年 朝鮮人の皇民化
1941年 台湾で志願兵制度
12月8日 真珠湾攻撃（ABCD包囲陣の打破）
マレー半島襲撃（資源確保）
〈第一次世界大戦に見る〉～世界恐慌の中～
①ファシズムの動きに見る戦争（日本）
ファシズムとは、民主主義などを否定する全体主義の政策のこと。日本はファシズムによって自国の利益を優先し、他国を侵略する考えが育ち始め、それを実行（朝鮮侵略、満州国設立など）した日本は世界の中心だった国際連盟まで脱退し、国際的孤立を深めた。そこで考えを改めればよかったけど、ものすごい勢いで突き進み、石油まで止められてABCD包囲陣これによって太平洋戦争に発展する。
②ブロック経済から見る戦争
ブロック経済とは植民地を関係を強化し、他の国には関税を高くする経済のこと。不況を立て直す政策。見戦争とは関係ないように見えるが、この政策をとれるのは植民地がある国だけ。ベルサイユ条約で植民地を手放した国は当然この政策に不満をもつ。ちなみにドイツはその後ファシズムをとりベルサイユ条約を破棄、軍備の増強を行い、戦争へ向かっていった。

枢軸国	日本	ドイツ	イタリア
	230万人	420万人	30万人
	＋80万人	＋40万人	＋3万人

連合国	ソ連	イギリス	アメリカ	フランス	ポーランド
	960万人	9万人	29万人	20万人	3万人＋
	＋700万人	＋3万人		＋40万人	5万人

▲各国の死亡者数（だいたい）※表記は兵隊さん。
〈第二次世界大戦に見る〉
第二次世界大戦とは、ドイツ中心の同盟国側と、イギリス中心の連合国側の間に起こった大規模な戦争である。この原因は、「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれた「バルカン半島」があったことがあげられる。
また、この実際の戦争だけでなく講和条約からも新たな戦争がはじまることになったのだと私は思った。（古千千）

連合国	
ロシア	170万人
フランス	135万8000人
イギリス	90万8000人
イタリア	65万人
アメリカ	11万7000人
日本	300人
同盟国	
ドイツ	117万4000人

▲各国の死亡者数（だいたい）

どうすれば防げるのか。
～今の世界から戦争を起こさない地球へ～
〈結論、戦争が起こる理由〉
前のページを見ていくと、結局戦争は経済の発展や土地をめぐる争い、思想の違いで起こったのである。
〈じゃあ、どうすればいいのか。〉
世界を統一して、言語も民族も1つにしてしまう！というやり方が一番早いのかもしれないが、そうもいかない。では、どうすれば良いのか。まず、お互いの国の考え方を理解し、受け入れること。国が違うのだから、考え方や思想が違うのは仕方がない。大事なのはそれをどう受け入れるか、である。たとえその考えに賛成できなくても、すぐに"戦争"という形で判断を下そうとせず、話し合いで解決することが大事なのである。
話し合いで失うものは無い。たった1つのことのために多くの人、物を失うのは、あまりにも無慈悲すぎるのではないだろうか。

パフォーマンス課題についてまとめた生徒Ａの提言レポート

課題：「なぜ，戦争は起きるのか？ どうすれば防げるのか？」について提言するレポートの作成			
評価	A	B	C
関心意欲態度	国際協調が大切であるとの認識をもって，学んだことを根拠にして，自分の考えを明確に主張している。	国際協調の大切さを，調べたことを活かして記述している。	国際協調の精神を基にした主張が書かれていない。
人数	68	10	0
思考判断表現	課題について，時間的及び空間的な視点をもって収集された資料を基に，政治，経済，文化などから複数の構成要素を総合的に関連付けて分析し，具体的な根拠を挙げて説得力のある主張を組み立てている。	課題について，時間的・空間的な視点をもって，政治，経済，文化などから二つ以上の構成要素を関連付けつつ分析し，具体的な根拠を挙げて明確な主張を述べている。	何らかの根拠に基づきレポートを作成しているが，捉えられている構成要素が，一面的なものにとどまっている。 根拠があいまいな主張がレポートの中心となっている。 情報の羅列に終わっている。
人数	30	45	3
資料活用	主張に適した多様な資料を複数選択し，多角的に関連付けて論述の根拠としている。	主張に適した複数の資料を選択し，それらがすべて論述の根拠として活かされている。	基本的な資料を読み取ってはいるが，主張の根拠として成り立っていない。
人数	38	38	2

本単元のパフォーマンス課題に係るルーブリック（※上記の人数は，生徒78名の状況である。）

4　成果と課題

パフォーマンス課題の「興味・関心・態度」の観点について，全員の生徒がＢ評価以上であったことから，ＥＳＤを踏まえた学習内容とともに，毎次の導入時に関連する現代の社会的事象を取り上げたり，振り返りの問いにて，学んだことを活かしながら現代や未来について考えさせたりしたことは，「よりよい社会や自分を志向」することに有効に働いたと判断できる。学習感想等からも，生徒が持続可能性への志向を価値として認識している様子が確認できた。また，自他の思考を可視化して話合い活動等を行わせた結果，充実した学び合いがなされ，生徒それぞれが，多面的・多角的に思考を拡大させていく様子が確認できた。そこでは，言語技術教育の手法を活用したことが大変有効に働いていた。パフォーマンス課題の追究については77名(調査対象78名)の生徒が「面白かった，やや面白かった」としており，パフォーマンス課題の質やそこに向かわせる過程もおおむね適当であったと判断する。今後，本研究での実践をさらに充実させ，生徒が様々な視点から時間的・空間的なものとの対比や関連において，自分や社会を見つめ直すことのできる歴史学習を積み重ねさせていきたい。

「思考・判断・表現」や「資料活用」の観点でＣ評価とした生徒は，すべて社会科を苦手と回答している生徒であった（４月実施アンケート調査より)。「教育のユニバーサルデザイン」の観点からアプローチすることはもとより，「きょうどう」の学びをさらに充実させなければならないことを痛感している。このためには，特に，理解できていない学習者が上手に質問できるようになることが大切だと考える。理解できていない学習者が上手な質問をすることは，教える側にとっても教わる側にとっても双方の理解が深まることが認知心理学の研究で明らかにされている。また，上手な質問とは「なぜ」や「しくみ」に関わる質問であることも明らかにされている。これらを踏まえ，社会的事象の意味や意義を理解しようとする発想をもたせることや学校全体での問答ゲーム等の取組を活かしながら，社会科の授業においても６Ｗ１Ｈ等を使いこなす技能を身に付けさせることを特に意識して今後の指導に当たりたい。

参考文献

猪瀬　直樹（2002）「日本人はなぜ戦争をしたか―昭和16年夏の敗戦」小学館
ＮＨＫ取材班（2011）「日本人はなぜ戦争へと向かったのか（上・下）ＮＨＫ出版
加藤　陽子（2011）「さかのぼり日本史『とめられなかった戦争』」ＮＨＫ出版
市川　伸一（2012）「教えて考えさせる授業 中学校」図書文化
佐藤　　学（2012）「学校見聞録　学びの共同体の実践」小学館
西岡加名恵（2016）「教科と総合学習のカリキュラム設計」図書文化

第3章　おわりに

新研究主題のもと，社会科で育てる資質・能力を明らかにし，地理的分野と歴史的分野において，研究・実践を行った。前研究主題のもとで持続可能な社会の形成に資する生徒を育成すべく取り組んできた，問題解決的な学習や生徒同士の学び合いの充実は引き続き研究の大きな柱である。これまでの培ってきた手法を活かしつつ，新たに論理的な思考力・表現力を発揮させるという視点を加え，さらなる充実を図った。また，これまで踏み込んだ研究に至っていなかった評価についても，パフォーマンス課題やルーブリックによる評価を取り入れることで，資質・能力の育ちを見取る評価の在り方に迫ることができた。しかし，どのようなパフォーマンス課題を設定すれば見取りたい力を表出させることができるのか，作成したルーブリックは適切であるのかなど，見直す度に新たな案が浮かんでは消えを繰り返すなど，試行錯誤の過程にある。

(Ⅰ)　問題解決的な学習の充実

研究（その１）では，「アジア州は，なぜ急速に経済成長することができただろうか」，研究（その２）では，「近代国家として成立するまでに進展した近代化はその後どうなるのだろうか」，（その３）では「なぜ，日本人は再び戦争に向かったのか」を単元を貫く学習問題として設定し，永続的な理解に至るように問いや学習形態を工夫するなどして単元構成をした。研究（その１）（その３）では，「どうすればよいか」を思考・判断・表現させ，持続可能な社会を志向させることができた。

(Ⅱ)　「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

研究（その１）（その２）では，小集団で役割分担をして追究させた成果を持ち寄らせて練り合い高め合う「協働」を，研究（その３）では，同じ結論に至るよう努力し合う「共同」と他者と協力して互いに納得できる「よりよい」解や解釈を導き出す「協同」の学びを構成した。ペア学習や小集団学習を取り入れ，ホワイトボードや付せん紙を活用したり，コの字型の座席配置を工夫したりするなどした。また，学校全体で取り組んでいる言語技術教育の手法を活用して，スピーチや問答ゲームの型を用いて話し合うことで，学び合いの質は高まってきている。さらに，学校全体の取組を活かしつつ，学びを深めることができる工夫を行っていく必要がある。

「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの中で生まれる帰属意識や自己有用感が自尊感情を醸成し，それが学びを活かし，よりよい社会や自分を思い描こうとする原動力になると考える。

(Ⅲ)　資質・能力が育つ評価の工夫

本質的な問いと永続的な理解を明確にした上で単元を構成し，パフォーマンス課題を設定し，その成果物をルーブリックを作成して評価することで，これまであいまいな点があった，何を，どのように，どんな基準で評価するかが整理された。特にペーパーテストやノートの記述だけでは，見取ることが難しかった，知識や技能，資料を活用する力や比較・関連・総合などを伴う思考力・判断力・表現力などを見取り，生徒に返すことができるようになったことは成果であったと言える。パフォーマンス課題の成果物に表出される力は，そこに至るまでの問いや課題の追究過程で習得した力の集大成であるため，単元構成・指導計画はしっかりと吟味しなくてはならない。また，問いや課題ごとにどんな見方や考え方，知識や技能が身に付いたかを生徒自身に振り返らせ，メタ認知させることも必要である。